

感謝せざるを得ない。

パソコン普及のお陰で、ヤフーの検索などを通じて、数人の引揚者のサイトにアクセスする事ができ、忘却の彼方に沈んでいた古い記憶を蘇生させることとなった。

この一文が昔虎林に住んだことのある人の目に留まって、生きている間に連絡が取れたなら、どんなにか嬉しい事だろう！

自分ではあまり人の世話になる事もなく、がむしゃらに突き進んで今日に至ったと考えていたが、日本人居留民会を組織運営された人々、引揚援護局で努力された方々など、目に見えぬいろいろな力が結集されたお陰で、今自分が生きているのだと痛感する。ありがとうございます。

赤い夕陽の満州

島根県 中原 祥晴

はじめに

私が生まれたのは、島根県松江市から日本海沿いに約八十キロメートル西にある仁摩町です。町は北側が日本海で、三方山に囲まれています。町東の山が有名な石見銀山です。私はこの町の大国小学校四年生を終了したとき、大正六（一九一七）年から撫順に住んでいる祖父母の所に行きました。私の長兄は、六歳のときからこの祖父母に引き取られていました。祖父は、撫順でいろんな公職に就いて活躍していましたが、昭和十四（一九三九）年に脳溢血で倒れてからは、寝たきりになっていました。そして、終戦後の混乱がたたって昭和二十一年二月に死去、父もあとを追うように三月に病死してしまいました。

私たちは、昭和二十一年七月に日本に引き揚げ

ましたが、翌二十二年三月に長兄が急死、相続人として長兄を一番頼りにしていた祖母は失意のあまり、その年の七月に亡くなるという不幸が続きました。

満州について私の記憶は確かなものではありませんが、当時ザラ紙の粗末なノートに書き留めておいたメモがありましたので、それを頼りに引揚げ前後の様子を書いてみたいと思っております。

終戦後日本に引き揚げてからの我が家は、売れる物はみんな食糧に代えて食いつなぐという毎日でした。私は妹や弟が成長するまではと、都会に出て働いていましたが、昭和三十年に故郷の農協に就職できて帰郷しました。私は、縁あって結婚してからも夫婦共働きで、仕事や子育てに追われるなど忙しい毎日を過ごしておりますが、年と共に一応安定した生活ができるようになりました。元氣だった母が八十八歳で亡くなりましたが、私たちの二人の娘は共に結婚して都会に住み、私たち夫婦は田舎の家で年金生活を送っています。

一 我が家と満州との関わり

我が家と満州の関わりは、大正六年に祖父が石見銀山の町、大森町の町長を退職して撫順に渡ったのが始まりでした。祖父は、撫順で実業協会会長や商工公会会頭を勤めるなど活躍していました。私の昭和十二年の工業学校の卒業式に、市街建設の功労者として来賓祝辞を述べましたが、昭和十四年撫順公会堂で演説中に倒れてからは職を離れ、病床に就く身になりました。

私は昭和十七年三月、小学校五年生になるときに、祖父母と長兄のいる撫順に渡り、東七条国民学校に転校しました。引揚げまでの、在満期間は僅かに四年半でしたが、戦争中の体験、特に終戦、引揚げという強烈な試練を味わい、精神的に得たものは大きかったと思っております。

二 青天の霹靂

私は太平洋戦争の真っ最中、東七条国民学校の菟原学級から、撫順工業学校第一本科機械科に進学しました。私のほか、同級生数人が機械科、電

気科、航空科などに入りました。私の兄や親戚の従兄弟たちが撫順中学校に進んだのに、私が工業学校を選んだのは、これから先、満州で活躍するには工業学校が良いという父の薦めがあったからでした。

撫順工業学校は、街の南の丘の上にありました。正門正面の建物が講堂で、その右側に第一本科、左側に第二本科の教室がありました。教室の奥に運動場があり、私たち一年生の寄宿舎は運動場の左、丘の上にありました。

菟原先生の内申が良かったのか、入学してすぐ私は分隊長（級長のこと）に任命されました。分隊長はゲートル巻きで木銃を担いだ、数人の分隊長を引率して登校しました。撫順工業学校は伝統的に生徒間の躰に厳しく、入校して一週間も経ったら「鍛えても良い」というしきたりになっていて、私たちが受けた軍事教練の査閲で厳しい講評を受けたといって、上級生による鉄拳制裁を受けました。でも厳しいだけの上級生ではありません

でした。全校合同行軍のとき、渾河の急流で流されそうになったときに命がけで助けてもらったり、撫順城の近くで一緒にしたうさぎ狩りは、今でも楽しい思い出です。

二年生になったときから、学徒動員で撫順機械工場の中でも一番奥まった場所にある、再生品係で働くようになりました。戦争が日増しに激しくなり、戦況はラジオのニュースで伝えられました。「海ゆかば」の音楽と共に、神風特別攻撃隊が敵の大艦隊に突入して、めざましい戦果をあげたという放送を聞き、私は日本軍が勝つ前触れだと信じ込んでいました。戦争の激しさが増すにつれて、毎日のように勤労奉仕に出るようになり、働き先の工場も頻繁に変わりました。担任の先生は、生徒が働いている工場を回って指導するのですが、教室の授業とは違って、滅多に顔を見ることはありませんでした。私たちの仲間十人は、鉄くず運びをしました。上級生の中には日本内地の工場に行った人もいたようですが、ほとんどは奉天方面

の工場や、鞍山の昭和製鋼所などに動員されてきました。

撫順は、今まで一度も空襲を受けたことはなく、ときたまB―29が飛んできて、空襲警報が出ても偵察しているだけらしく、爆撃することはありませんでした。奉天がB―29の空襲を受け、満軍の蘭花特攻隊が活躍したという話を聞きました。

昭和二十年八月十五日、その日は雲一つない空に真夏の太陽が輝いていました。今日正午にラジオで重大発表の放送があるというので、友人と一緒に再生品工場の事務所に駆け込みました。中にいた人たちは緊張した面持ちで、棚の上のラジオ放送に聞き入っていました。私たちも聞き耳を立てましたが、雑音が激しくて何のことかさっぱり分からないままに終わってしまったので、何だという気持ちで外に出ました。私たちが聞いた感じでは、予想したとおりソ連に対しての宣戦の大詔だと思いました。いつかソ連とは戦争になるだろうと噂されていましたが、事実、そのころソ連軍

は国境を越えて攻撃を始めていたのです。午後の作業時間になっても、主任は現れませんでした。

主任が三十分も過ぎてから出てこられて「今日はこのまま家に帰りなさい。明日は学校に出るように」ということでした。私は、吉林からきた無二の親友稲富君と一緒に家に帰ることにしました。途中、稲富君に招かれて満鉄社宅の彼の下宿に寄り、当時禁止されていた「支那の夜」「白蘭の歌」など四、五曲のレコードを聴かせてもらいました。帰りかけたとき上級生がきて、真剣な顔で「日本は戦争に負けて米英に無条件降伏した」と言うのです。私たちは半信半疑でしたが、とにかく家に帰ることにしました。私にとっては、まさに青天の霹靂でした。台北町の街中で中国人の学生らしい五、六人とすれ違ったとき「リーベンレンハイパー（日本人は負けた）」と肩を軽く突かれ、なんだか不気味な気がしました。いつもは社宅の花壇に咲いている花を眺めながら、プラタナスの並木通りを気持ち良く歩いて帰るのに、今日は気もそ

ぞろでした。家に帰ってみると、家族も先行きの不安からでしょうが、気まずい雰囲気でした。

翌十六日、久しぶりに登校しましたが、学校の周りには雑草が生い茂っていて、使ったことのない防空壕が庭のアクセサリーのように見えました。撫順にいる学生は、総勢二百人全員が集合しました。棟久蔵校長先生は壇上に立って、「三十年の伝統輝くこの学校も今日で閉校することになりました。今後は、家族がまとまって慎重な行動を取ってください」と最後の挨拶をされました。開校以来校長を勤めてこられ、今また自分の手で学校を閉鎖される心の内はどんなであったろう、と思いました。校長先生は工学博士で、背丈は五尺に満たない小柄な方でしたが、剣道五段の猛者で古武士の風格があり、私たちの誇りでした。

三 終戦時の撫順の様子

日本が無条件降伏する前の八月九日に、満州に侵攻したソ連軍は、満州開拓団の部落を根こそぎ押しつぶし、暴行略奪の限りをつくしました。ソ

連軍に追われた日本人は、着のみ着のまま逃げまどい、ただ南に向かって避難し、疲れ切って続々と撫順の町に入ってきました。大半の人は学校の教室に収容されましたが、運良く市内の各家に宿泊できた人もいました。我が家には、開拓団から避難して来られた山野さん一家、市外から来られた国武さん一家、元日本兵の筒丸さん、市内にいた勝目さんの五家族が入居され、にわか賑やかになりました。

撫順市民は満州には精鋭関東軍がいて、ソ連軍を迎え撃つと信じていましたから、防衛のための戦車壕掘りにも積極的に協力しました。しかし、関東軍は飛行機で停戦のビラをまいただけで、勇ましく戦う姿はついに見ませんでした。撫順に最初に進駐してきたソ連兵は、囚人で編成した部隊だったので、街の治安は急速に悪くなり、日本人の女性だけではなく、中国人の婦人も暴行されるという事態が頻発しました。女性は男装して、ソ連兵の目に付きにくいようにしました。彼らは女

性を襲うばかりでなく、各家の品物を強奪しましたから、我が家では窓に畳を立てかけたり、玄関には鍵を五個もつけたりしました。ある日、ソ連兵が襲ってきて、鍵を四個まで壊し五個目を壊そうとしたところで諦めて引き揚げたので、危うく助かりました。

街ではソ連兵の侵入を防ぐため、街の外周に防壁を建てることにしました。質屋を営んでいた中国人が、火事で焼失した質入れ品の弁償金を都合しに上海方面に行つて帰つてこなかったため、その家の焼け残った柱などが格好の材料になりました。防壁の一方所に通用門を作つて、屈強な若者が二人一組で門番につきました。そのうち、町の治療維持は中国の警察と中共軍が担当するようになって、多少落ち着きを取り戻しましたが、ソ連兵の乱暴は相変わらず続きました。

撫順では、武装解除された日本軍の武器弾薬が中国軍に接収され、日本の行政機関の建物は中国人の手に渡りました。

撫順が少し落ち着いたころ、ソ連軍が我が家に住宅の提供を申し入れてきましたので、空いていた貸家を提供することにしました。入ってきたのは、ソ連軍のゲー・ペー・ウー（国家秘密警察）に所属する中佐だということでした。若い当番の兵隊が付いていました。ある日兵隊が料理してほしいと、生きた鶏を父の所へ持つてきましたので、父が鶏を絞めてやると、お礼に夕食に招待すると言ってきました。男ばかり四人で行きましたが、油っこいけれども、珍しく美味しい料理でした。

撫順炭鉱は埋蔵量十億トンといわれ、良質な無煙炭が露天掘りできる世界でも屈指の炭鉱で、日本海軍の軍艦が、真珠湾攻撃のときの燃料に使つたと聞いています。終戦で炭坑が閉鎖され職を失つた日本人は、不安な気持ちで家に閉じこもっていましたので、街中には不気味な沈黙が漂っていました。

こうしたときに、北満からの避難者の中に、新京医大にいた私の兄がいました。兄は機関車にぶ

ら下がってきたと言って、真っ黒な顔をしていましたが、これで一家が無事そろうたわけで、我が家はひと安心でした。

街では、生活に困った日本人が強盗を働くといった事件が起きました。捕えられた犯人は広場で目隠しをされ、中国人の警官五人によって銃殺されました。警察官が死体をそのままにして引き揚げてしまったあと、見物にきていた中国人が石や煉瓦を投げつけるので、死体はめちやくちやになっしまいました。

だんだん寒くなってきたところに、学校から「遊んでばかりいられないだろうから、希望者は就職したら」と、言ってきました。仕事は、以前働いていた機械工場の再生品係でした。行ってみると、中国人もいましたがほとんどが日本人で、第二本科の学生が鑄物の砂型を作ったり、作った砂型に溶かした鉄を流し込む仕事をしていました。私たちに与えられた仕事は、鉄くずの運搬や鑄物製品の仕上げ作業や、その運搬でした。製品のスト

ーブや鍋は、みんな貨車に積まれてソ連に送られました。納期は厳しく指定されていて、遅れたら責任者は銃殺すると言われていました。私たちは、できあがってまだ熱い製品を貨車積みしました。

工場での製品は街では高く売れますので、従業員が製品を持ち出さないように、ソ連兵や中共兵は出入口で厳重に見張っていました。でも、みんな工夫して持ち出して換金していました。私の家に同居していた親戚の今田晴通君は、まだ中学生でしたが、馬車の車軸に使うベアリングが高く売れるというので、私と一個ずつお腹に隠して気付かずに持ち出しましたが、お腹が冷えて難儀しました。昭和二十一年の正月を迎えるころは、こんな様子でした。

年が明けてからは、今までの工場とは反対方向の化学工場に行くことになりました。私の家からは好都合な場所でした。与えられた仕事はコークスの運搬で、今までの工場の鉄を溶かすための燃料でした。この作業を割り当てられたのは、第二

本科三年生二人と私の同級生と私の計四人でした。この化学工場に行くには途中中国人街を抜けて、硫黄のにおいが立ちこめる、えんじ色の川つ縁を通って行くのですが、川に架かっている橋の下には中国人の凍死体がよく見られました。

コークスは、荷台を引いた馬車三台で鋳物工場に運びました。荷台への積み込みは、四人です。ずと一時間ほどで山盛になりました。工場への運搬は三年生がしますので、残った私たち二人は馬車が帰って来る昼ごろまでぶらぶら遊んでいました。午後もう一度コークスを積み込んで、今度は四人が馬車に乗って運搬しました。途中、中国人街でコークスをくれとねだられて困りました。

朝コークス積みに出勤するとき、街にいるソ連兵が私たちが勝手に使おうとするので、「化学工場に勤務中」という腕章を着けたのですが、字の読めないソ連兵には何の役にも立ちませんでした。字の読めないソ連兵が呼んでいるのも知らん顔で逃げることにしました。ある日、逃げ切れずに捕ま

って胸に拳銃を突きつけられたときには、どうなることかと思いましたが、撃たれませんでした。

四 祖父と父の死

脳溢血で倒れ寝込んでいた祖父は、終戦後の混乱がこたえて病状が悪化し、昭和二十一年二月二十二日に亡くなりました。祖父が亡くなって部屋が空いたのを知った中共軍は、早速部屋を貸せと要求してきました。私たちは二階を明け渡して、一階の八畳と六畳で生活することになりました。そのうち日本人は、中共軍とソ連軍の使役になり出される日が続きました。中共軍の使役は掃除や炊事で比較的楽でしたが、ソ連軍の使役は重労働でした。撫順の工場の機械を全部本国に送ると言って解体の上、貨車に積み込まれました。大きくて分解できない機械は工場の壁を壊し、線路を敷いて積み込まれました。

街中では中国人が許可も受けず所かまわず露天を広げ、まるで市場ができたようになりました。警察が取り締まりを始めると品物はそのままに逃

げてしまうので、雑多な商品が道路上に散乱して
いました。

蒋介石の国府軍が撫順に迫っているという情報
が伝わってきました。そのころ撫順ではコレラ、
発疹チフスなどの伝染病が避難民から次第に市民
にも広がってきました。私はそのころ出血性黄疸
にかかり、四十度以上の高熱が出て、三日ばかり
うわごとを言うなど、意識のない状態が続きまし
た。周りの者はもう駄目だと思っていたのに、運
良く回復しました。しかし家族が次々に発病し、
最後に寝込んだ父の容態は一向に回復しませ
んでした。兄が新京医大生のとき世話になった女屋
生に往診して頂きましたが、ろくな医薬品もない
時期で、回復の兆しは見えませんでした。父は島
根に残している母や子供のことを気にしながら、
昭和二十一年三月十七日の午後、息を引き取りま
した。それまで父の胸に聴診器を当てていた兄が、
父の胸にじかに耳を当てるのを見て、私はいたた
まれなくなつて部屋を飛び出しました。親の死に

目に遭うのは本当につらいものです。

知り合いの葬儀屋に頼んで火葬場に運びまし
たが、火葬用の重油が品切れで、火葬場には百体ほ
どの遺体が積み上げられている有様でした。仕方
なく父の遺体もその中に置いて帰りました。帰途
に通った永安小学校は避難民の住まいになつてい
ましたが、ここでは遺体が校庭の防空壕に入れら
れていました。中国人の追い剥ぎにあつたのでし
ょうか、遺体はすべて丸裸にされていました。そ
んな遺体を食べようというのでしょうか、野犬が
防空壕に首をつつこんでしきりに首を振っていま
したし、寒々とした校庭の周りに立っているポプ
ラの木にはカラスが群れていて、私たちが立ち去
るのをうかがっていました。秩序を失った社会で
はだれかに助けてもらうこともできません。自分
自身が生きることと専念しなければならなかつた
のです。

五 暴動

撫順の市街地にいた中共軍は、国府軍が接近し

てきたので市外へ移動して行きました。中国人は、中共軍が学校などに放置していった品物を盗みにきていましたが、そのうちに日本人の家の物も盗んでいくようになってきました。人数もだんだん増えて、窓を蹴破つて侵入するようになりました。そして、布団や衣類などを窓から放り出す者と受け取って運搬する者と、作業を分担するなど組織的になってきました。盗る品物がなくなると、床板、天井板、窓枠に至るまで持ち去る始末でした。日本人も、ここまでされると黙って見ているわけにもいかず、隠し持っていた日本刀や竹槍などで反撃して、その日は一応治まりました。その後、交差点でたき火をして徹夜で警戒しましたが、三月の半ばとはいえ、相当な寒さでした。

翌朝、空がほんのりと明るくなりかけたころ、教会の鐘が合図だったのか、中国人が集団で押しかけてきました。撫順の街は、道路が碁盤の目のように通っています。中国人と日本人が互いに石やビール瓶や一升瓶を投げ合い、引いたり押した

りの騒ぎでありました。攻められて逃げるときは恐ろしいものでした。ソ連兵が仲裁に入ってくれましたが、話し合いの最中にも中国人が物を盗るので、ソ連兵が拳銃で威嚇射撃をしました。中国の警察官も出動しましたが、暴動は治まるどころかますます激しくなるので、警察官が日本人の味方をして木刀を貸してくれるということもありました。そのうち国府軍が入ってきましたので、街は自然に静かになりました。日本人にはみんな家に帰ること、付近を清掃して国府軍の青天白日旗を掲げること、と通達がありました。夜になって、先発隊らしい数人の兵隊が大通りの四つ角に立っているのが見えました。本隊の到着は真夜中でした。私たちは、昼間の攻防戦の疲れでうとうとしていました。急に賑やかになったので、本隊の到着に気付いた始末でした。

国府軍からも早速部屋を貸してくれと言ってきましたので、中共軍が入っていた二階の部屋を貸すことにしました。蒋介石の指令だとかで、国府

軍は日本人には好意的で、日本人も商売ができるようになりました。遺体焼却のための重油も手配され、一週間ぶりに父の火葬ができることになりました。父の棺桶は以前置いたままになっていましたので、拝みながら火葬いたしました。

撫順から四キロメートルばかり離れた渾河の鉄橋に近い山の上に、トーチカを作るために国府軍の使役に出ました。

この辺は麓の学校農園でニンジンやほうれん草の収穫があり、松の苗を植林したり、休憩のときにロバに乗って遊んだりもしましたが、今は敵対する中共軍が見える第一線になっていて、ときには砲撃もされるということでした。この近くの元帥林は、爆死した張作霖が自分の墓地にするために広大な寺を造った所ですが、そのころは見る影もありませんでした。

私も撫順競馬場を米軍の飛行場にする作業にかり出されましたが、そうこうしているうちに日本に引き揚げる日が近づいて参りました。

六 引揚げ準備

撫順は日本人が長い間住み慣れたところですが、所詮は外国です。敗戦によって引き揚げるということになれば、何かと作業がありました。引揚げについての指示は日僑善後連絡所がしていました。日本人は一人あたり一定の額以上の現金を持ち帰れないと決まったのです。超過分はこの連絡所に預け、日本で払い戻されることになりました。私の家も千代田生命の代理店をしていましたので、積立金などかなりの現金を持っていましたが、その金も預けました。北満からの引揚者が先に引き揚げましたが、撫順の住民はいつになるか分かりませんでした。私たちは、生活費を得るために家財道具などを売ることにし、東三條通りの市場や映画館の付近で店開きをしました。知り合いの人も売りにきていました。売れなければ困るというほどのことでもないので、値段は適当につけていました。店番は交代でしたから、非番のときはその辺を見て歩いたり買い食いしたりしました。周

りにはいろんな店があつて、軒下に横山大観の軸物などがぶら下げてあつたり、家宝にしていたのではないか、と思われるような古道具類が無造作に置いてあつたりしました。中国人は衣料品を欲しがるというので、中国人街にも出かけましたが、用心しないと危ないというので、友人たち五、六人で出かけました。以前女学生が衣類を売りに行って殺され、売り物の衣類はおろか着ている物まではぎ取られ、死体は肉として売り飛ばされたという話を聞きました。私は買いそうな中国人を見つけたら、友達に周りを囲んでもらった後、腹に巻いた品物を見せました。数人の中国人が互に値を競り合いますので、高値をつけた者に売りましました。戦時中は中国人の店に入ることなどありませんでしたが、たばこ屋に入ってみて驚きました。何十種類ものたばこが棚いっぱいに並んであつて、私など見たこともない種類のたばこもありました。

撫順にも初夏が訪れ、街路樹の影が日増しに濃

くなつてきました。私たちの生活も日常生活には何の不安も感じないほど落ち着いてきました。特に、私はまだ十五歳で何の責任もない立場でしたから、祖母や兄のそばでただおとなしくしていればよい、のんきな身分でした。家の二階の窓から見えるホーリネス教会ではダンス音楽に乗って中国人が踊っていたり、街の通りでも、国府軍の兵士と腕を組んで歩く日本人女性の姿が見られました。

そうこうしているうちに引揚げのときが近づき、準備に追われるようになってきました。所持品にも制限があつて、一人の違反が組全員の帰国禁止になるといので、惜しいと思いつながら持って帰れなかつたものもありました。許可された衣類は、夏冬各一着、帽子一個、靴三足。貴金属は絶対に駄目でした。不安だったのは靴でした。道中が長くなる予感があつたからです。写真は風景の写っているものは駄目だということで、人物だけ切り抜きました。書類も一切駄目で、手帳なども文字が

書いてあれば駄目だということです。外にも持物はいろいろありました。鍋、やかん、布団、小さく割った薪などです。布団は持ちやすいように薄く縫い直しました。食料品は米は駄目ということなので、小麦粉類や肉を煮詰めてデンプにし、水飴、食塩などできるだけ多く持ちました。飲料水は、五リットル入りの容器をトタンで作ってもらって各人が持ちました。いろいろな物を入れるのに、帯芯で大きなリュックサックを作りました。現金、一人二千円で日本に持ち込めるのは千円までということでした。貴金属の指輪など、どう隠してもレントゲンで検査するというので、あきらめるほかありませんでした。大切な軸物や少しばかりの書類は、芯を抜いた帯に縫い込んで隠しました。一応できあがった各自の持物も、出したり入れ替えたりしてようやく準備ができあがりました。祖母の分はみんな得手分けして持ち、祖母は祖父と父の遺骨を砕いて小さな箱に詰め替えたものを胸に掛けてもらいました。

準備万端整って、順番がくればいつでもという体制になりましたが、いよいよ明日という日になって、船の都合が悪く当分の間引揚げ中止と言われ、がっかりするという一幕がありました。それから数日後、明日出発と連絡があり、昭和二十一年七月一日午前四時に東七条通りに集合することになりました。一緒に住んでいた国武さんは、満鉄の技術者としての仕事があつてあとに残り、奥様とお嬢さんだけが引き揚げました。国武さんに限らず特殊な技術者は、閉鎖された工場を中国側に引き渡したり、中国人の工場運営に協力するために残留しました。

七 撫順を出発

撫順を後にする日がきました。早朝四時に出発というので、早くから起きて準備していました。集合場所になっていた我が家の前には、人が集まり始めていました。私たちも荷物を持って外に出ましたが、目の前の我が家にまだ何か忘れ物があるような気がして、確かめに戻ったりしました。

家に入ってみると、持ちきれなかった布団などそのままに残っていて、ちよつとした旅行に出かけるような気もして、何ともやりきれない思いでした。やがて列は進み始めましたが、荷物の重いには閉口しました。やつと検査場に到着、既に多くの人が待っていました。ここで、おにぎりを食べました。米のご飯はこれが最後でした。携行品の検査を受けるために前後左右、三メートルの間隔をとって持物を全部並べ、服のボタンもはずして立っていると、各列の前から順番に検査が始まりました。検査官は中国人の若い学生で、時間を掛けて丁寧に品物を調べています。品物の間に手を入れたり、水飴などずかしてみたりしていました。いよいよ私の前にきたとき急に雨が降り始めました。中国人は雨が嫌いなので、私のものはちよつと見ただけで、もう良いと言って行ってしまうました。向こうは良くても、ぎゅうぎゅうに詰めてきたものをしまうのが大変でしたが、検査が早く終わったのは好都合でした。検査という第一

関門は通過しましたが、これからまた駅まで四キロメートルも歩かなければなりません。今度は検査後、禁制品を持ち込まないように、兵隊が道路の両側を見張っていました。街には、あとに残る人たちが涙ながらに私たちを見送ってくれましたが、その中にいた特殊技術者とその家族、国府軍に要請されて残る看護婦さんたちの涙を見て、私たちは胸を締め付けられる思いでした。

ようやく駅に着きましたが貨物駅でした。しかし一向に列車はきません。駅に着いたとき勢い込んでいた人たちも、いつの間にかホームに座り込んでいました。私も、いつの間にか座り込んでいました。ふと目を覚ますと列車が入っていましたが、屋根のない貨車でした。一両の貨車に百人が乗らなければなりませんので、皆の荷物を枠の周りに積み上げて、中にゴザを敷いて女性、子供、老人が座り、私たち若い者は枠に腰を掛けて、荷物の上に足を伸ばすという格好で乗ってゆくことになりました。乗車が終わると、列車

は夜明け前の静かな冷たい空気を切るように撫順の地を離れました。みんな黙って懐かしい思い出の風景を眺めていました。空がきれいに晴れていました。一時間ほどで奉天に着きましたが、ちょっと停まっただけでした。太陽がさんと照りつける果てしない草原を数時間走り続け、駅でもない小さな街に停車しました。列車の周りには、中国人の物売りが駆け寄ってきましたので、まず水とお茶を買いました。三十分ほど経って発車した列車は、一直線の線路をただひたすらに走り続けました。貨車の枠に腰を掛けていると、風を切って爽快でした。乗っている女性、老人、子供たちも、みんな元気で大きな声で歌を歌いました。貨車にはトイレがないので、用便は連結器の所でみんなに支えられながら済ませました。夜になっても列車は走り続けましたが、やがて闇の中で停車しました。駅ではありませんでしたが、乗船地の葫蘆島に近いことは分かりました。世話人たちが集まって、列車を葫蘆島に直行してもらおうよう

運動するために、一人あたり百円ずつ集めることにしました。

夜中後方の貨車で、中国人が娘を出せといって騒いでいるというので、私たちの貨車では婦人たちを荷物の陰に隠すやら、毛布を掛けるやらしましたが、幸い何事もなく夜が明けました。夜が明けてから列車が動き出し、二十分もすると小さな停車場に停まりました。見ると、大勢の人が手を振りながら、こちらに向かって来るのが見えしました。私たちより一週間も先に撫順を出た人たちでした。葫蘆島まで直行する案は駄目になって、この小さな停車場で下車しました。ここは葫蘆島に近い錦縣という所で、引揚者の集結地になっていました。

錦縣にきてから十日余りが過ぎて、葫蘆島に出発することになりましたが、錦縣の二駅先の錦西からは米軍の管轄に入るのでいろいろ注意事項を聞かされました。出発しましたが、米軍の管轄地域は午後四時以降は進入禁止でしたので、手前で

停車して宿泊することになりました。湯を沸かしたり、すぐ脇の河で汗を流しました。夜になって急に出発という指令が出ましたので、火の始末などして貨車に乗り込みました。日がとっぷり暮れた中を、およそ一時間も走ったところ、駅に降りさき、一寸先も見えない闇の中を宿舎に向かって歩きました。重い荷物を持って、柔らかい砂地を前の人にすがりつくようにして歩くのですから、老人や子供の疲労は大変でした。さらに山を登るというおまけまで付いて、やっと着いた宿舎というのは既に満員で、みんな周りの草むらに寝込んでしまいました。翌日、目が覚めたときは、すっかり太陽が昇っていました。午前中に船に乗ると聞かされ、昨日苦勞して登ってきた道を駅に向かいました。こんなことなら、駅の近くに野宿すれば良かったとぼやきましたが、今日乗船できるという喜びは疲れを吹き飛ばしていました。

八 航海

大陸での最後の日は難儀なことが続きましたが、

乗船の日は良い天気で、みんな勇んで埠頭行き列車に乗り込みました。今度の貨物列車には屋根がありました。波の音と潮の香りが貨車の中にまで走ると、波の音と共に潮の香りが貨車の中にまで匂ってきました。貨車の中から水平線が見え、「ああ、とうとうここまで来られた」という思いがこみ上げてきました。埠頭には、私たちが乗る船が接岸していました。沖には軍艦も数隻停泊していました。広場で最後の所持品検査があり、それが終わると一列に並んで襟首から背中、ズボンのバンドをゆるめて、腹から股下まで動力噴霧器でDDTの粉を吹き付けられました。

私たちの乗る船は、米国製の貨物船で数千トンはありそうでした。真っ白な船体の舳先には、「V O 8 2」と鮮やかに記されていました。船体の横腹には急な階段があつて、大きな荷物を持ってこれを登るのは骨の折れることでした。船倉は三つありましたが、私たちが入ったのは第二船倉でした。船倉は暗くて蒸し暑かったので、私はいつも

甲板に出ていました。幸いというか船員はみんな日本人でしたから、何となく気楽な気分でした。午後五時には全員の乗船が終わり、出航は明日朝七時と決まりました。今日は三隻が出航しました。私たちの船は二番目に出航しました。先頭の船が出て行くとき、みんな千切れるほど手を振りました。パイロット船が、私たちの船の舳先を引張って外海に向かいました。三番目の船の人たちが振ってくれました。みんな顔は喜びでいっぱいでした。

甲板に出ると、顔に真夏の太陽が照りつけましたが、潮風が気持ちよくなでてくれました。気が付くと、大勢の人が限りない愛着と深い思い出の残る満州の大地が、今日の前から消えようとしているのを、万感の思いを込めて立ち尽くしていました。

第一船も、第三船も視野に入らなくなっていました。船の食事は、朝と夕は野菜入りの味噌粥、昼は乾パンでした。例によって船倉は暑くてたま

りませんでしたので、いつも甲板で過ごしました。波に揺られながら満天の星を眺め、撫順の話をしたり、唄を歌って楽しく過ごしました。「バタバヤの夜は更けて」という流行歌は哀愁をそそるものがあつてよく歌いました。そして涼しい海風に吹かれながら、船の揺れが揺りかごのようで気持ち良く、知らぬ間に寝入っていました。退屈な航海中楽しみだったのは、正午海図に書き込まれる船の現在位置を見ることでした。ほかに面白かったのは海の生物との出会いでした。甲板で海を眺めていると、時折トビウオが波間からさっと飛び立って五十メートルばかりで波に消えたり、船について泳ぐきれいな魚が見えたりしました。船尾に立ってみると、スクリューからわき上がる海水が青く白くまた緑にも見えて、美しく長く尾を引いていました。あるときは周りが真っ白に見えるほどのクラゲの大群に出会い、それがスクリューに巻き上げられる光景はものすごい眺めでした。

まもなく日本という所までできていたのに、故国

の土を踏まずに亡くなる人がいました。遺体は水葬にされることでした。葬送に立ち会いましたが、デッキに置かれた板の上に、こもに包まれた遺体が置かれ、おもりの石が結びつけられていました。読経が済むと汽笛が鳴り響き、遺体は海中に吸い込まれていきました。船は汽笛を鳴らしながら大きな弧を描いて一回りして、再び日本への帰途につきました。船の甲板は鉄ですから夏の日差しに焼かれ、ゴム靴の底を通して足の裏が痛くなるほどでした。顔を洗う水も海水でしたから、乾いた顔や腕に塩ができて、ざらざらする始末でした。

久しぶりに船に出会いました。どのだけれども分かりませんでした。しきりに手を振っている人がよく見えて、なんとなく懐かしく思いました。しかし、一向に陸地も見えず、本当にこの船が日本に向かっていくのか気になりました。そんなときに姿は見えませんでした。飛行機の爆音を聞き、終戦前にも聞いた嫌な気持ちを思い出し、ひ

よつとしてどこかの無人島にでも降ろされてしまおうのではないかと、船もろとも沈められてしまおうのではないかなど、そんなことはあるはずがないと思いつきながらも不安が募りました。

葫蘆島を出てから数日が過ぎたころ、遠くに島が見えてきました。海図で確認して無事に日本海に入っていたことが分かり、心の底からほっとしたものでした。私たちはついに舞鶴港に入港しました。船の両側は満州とは違って緑がいっぱいで、まるで箱庭のように思えました。船は、岸壁から百メートルほど離れた所に停泊しました。すぐにも上陸できると思っていました。仙崎港に入った引揚船からコレラ患者が出たというので、私たちも検便を受けなければなりません。幸いみんな陰性でしたので、七月二十三日待望の故国の土を踏むことができました。

九 帰郷

私たちは岸壁にある倉庫に入って、荷物検査と消毒を受けました。倉庫の壁に「引揚げの皆様、

お帰りなさい。長い間ご苦労様でした」と書かれているのを見て、心温まる思いでした。そこから汽車で二十分ばかりで元海軍の寮に着きました。すぐに風呂に入ることになって、みんな素っ裸になって浴槽に飛び込みました。大勢ですから芋の子を洗うようでしたが、長い間のアカやほこりを落とし、生き返ったような気がしました。風呂を出ると新しい下着が支給され、本当にさっぱりしました。今度は三種類の予防注射でした。種痘もされました。食事で白米のご飯を頂いたときに、日本に帰った実感をかみしめました。宿舎には歩いて行くことになりましたが、荷物はトラックで運んでくれましたので、手ぶらで周りの景色を眺めたり、お互い話し合ったりしながら一山越えて、宿舎の上寮に着きました。十畳の部屋に八人が入りましたが、久しぶりの畳の感触を味わいながら落ち着いた気分でした。しかし夜遅くまで援護物資の配給、満州通貨と日本円との交換、故郷へ電報を打つなど大変忙しい一日でした。

翌朝山陰線の出発は、朝六時でした。我が家で家族同様にしていた国武一美さんも、ここで別れでした。窓から見る海岸の景色はすばらしいものでしたが、大平原をまっすぐ走る満州の大平原に比べてトンネルの多いには閉口しました。途中、家族同様にしていた今田晴通君、佐智子姉さん、祥恵ちゃんとも別れて、私たちは四年半ぶりで仁万駅に降り立ちました。電報が遅れたとみえ、だれも迎えにきていませんでした。祖母と祥元兄と私の三人は、呆然とホームに立っていました。駅にいたのも知らない人ばかりで、大きな荷物を持って疲れた様子の私たちを、げげんそうに見ていました。駅前の魚屋さんに荷物を預けて徒歩で家路につき、撫順を出発して二十四日目の七月二十四日午後三時ころ懐かしい我が家に帰り着きました。家に母と兄弟たち五人がいました。母が一番会いたかったであろう父は白い布に包まれ、祖母の胸に抱かれた遺骨でしたから、そのときの母の思いは察するにあまりがありました。私が一

番会いたかった大叔母さんも亡くなっていて、その姿が見えないのは寂しく悲しいことでした。戦中戦後の混乱期に、中原家の相続者が三人も亡くなってしまう、三男の私が継承者となって家を再興することになったのは、思いがけない巡り合わせでした。神仏、先祖のおかげを忘れず、頑張るしかないと言った次第でした。